眞言宗安心讀本

382
283

始

特 235
693

栂尾祥雲 著

眞言宗安心讀本

古義眞言宗學務部版

序

本書は昨年、古義眞言宗學務部主催の教學講習會に於て講述せる内容を少しく加減して讀本式にしたものである。

なるべく平易に、なるべく要領を得るやうにと志したのであるが、さて出來上つて見ると、意に滿たぬ所も少くない。

しかし、何事でも初めから完璧を期することは無理である。これが縁となり刺戟となつて、より立派なものが世に出ることを念願する。本書も何等かの意味に於て、密教理解のお役に立つことが出來れば幸である。

昭和十三年三月

著者

眞言宗安心讀本　目次

第一課　安心の意義と動機……（一）

安しんと安じん（一）……安心と不安（二）……人生苦の現實（三）……四苦八苦（四）……德義や思索上の苦惱（六）……安心問題の動機（七）

第二課　安心なる言葉の用否……（九）

解脫と安心（九）……達磨大師と安心（一〇）……智者大師と安心（一〇）……これらの安心と止觀（一二）……善導大師の安心說（一二）……支那に於ける密祖と安心の語（一三）……安心の語に對する宗祖と末徒（一三）……密宗に於ける安心と住心と信心（一四）……能入の深信と能度の信解（一五）……二種信心と安心（一六）

第三課　古來の宗意安心說……（一八）

宗意と安心（一八）……密宗の宗意とその表現（一八）……密宗に於ける諸種の安心

說(一九)……根本の安心(二〇)……枝末の安心(二一)……それは安心か起行か(二二)

第四課　根本安心の內容……(二四)

祕密莊嚴安心と全一我(二四)……全我安心と我卽法界(二六)……全我と一卽一切(二六)……全我と凡聖不二(二七)……凡聖不二と而二莊嚴(二八)……人法不二と物我一體(二九)……全我體認と止觀(三〇)……全我安心と人生苦の解脫(三二)……病氣と貧乏の見方扱ひ方(三三)……その境遇を生かすこと(三四)

第五課　總安心と別安心……(三五)

宗意安心の一貫性と多樣性(三五)……古來の二根安心說と三根安心說(三五)……總別安心說の由來(三六)……淨土宗の總別安心と密宗安心敎示章(三七)……二根安心說の檢討(三九)……密宗に於ける三品悉地と三根說の意義(四二)……密宗に於ける總別安心(四三)

第六課　六種安心と十種安心……(四五)

無畏と安心(四五)……六無畏(四六)……六種安心に對する苦惱(四六)……第一乃至第三の苦惱と安心(四八)……第四第五の苦惱と安心(四八)……第六の苦惱と安心(五〇)……これらの圖示(五一)……十種安心と一貫性(五二)……前九種安心と第十安心(五三)

第七課　安心と敎化……(五四)

密宗僧侶としての安心(五四)……密宗の根本安心と敎化の問題(五四)……釋尊は如何に敎化せられしや(五五)……佛敎聖典の矛盾と四悉壇(五六)……大日經の慧と方便(五七)……大日如來の化儀(五七)……無碍樂說と一切智々(五八)……根本安心を通じての諸種の敎說(五九)……四重祕釋とその意義內容(六〇)……十住心に於ける淺深二種の扱ひ方(六一)……密宗本尊の多樣なる所以(六一)……密宗に於ける物慾祈禱の攝取(六二)……非常時に處する覺悟(六三)……約言(六四)

眞言宗安心讀本

古義眞言宗學務部編

第一課　安心の意義と動機

安心と　いろいろに心配や惱みがあつたけれども、これでや、**安心**つと安心した。と云ふやうに、重苦しい不安の心から遠ざかり、心が安らかに氣樂になつた場合に安心と云ふ言葉が使用せられて居る。しかしこゝで安心と云ふのはたゞ一時的の晴やかさ安らかさで、永久に變らぬ晴やかさでも安らかさでもない。恰も秋の空色のやうに、ちよつと晴れ渡つたかと思

ふと何時のまにか何所からともなく曇つて來るのが普通である。この一時的の晴やかさ安らかさではなく、如何なる不遇にも逆境にも心が亂れないで、永久の晴やかさ、安らかさを保持する境地を佛教では安心と云ふのである。

この世間にいはゆる安心と佛教上に於ける安心とは全く同一の文字であり、何れもが心の不安を取り去り、その安らかさ晴やかさを指すものであるけれども、一は一時的のものであり、一は永久的のものなる所に、その相異點があり、その相違點のあるところからして、一は安心と清んで讀み、一は安心と濁つて呼ぶことになつて居るのである。

安心と不安　人がこの永久の安心を望み求むることは、かの岩にせかるゝ谷川の水がせかるれば、せかるゝほど、その堰を乘り越え、打ち破りて流れ去るが如くに、不安や惱みがあればある

ほど、これに抗し、これに激し、その安心を求むることが熾烈になつて來るのである。若しこの世の中が常に樂しく面白く、かの道長が「この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」と歌へる如くに、永久に何等の不安も惱みもこの世の中にないものとせば、殊更ら安心を求むることもない筈である。

而もこの望月もかくる時があり、一時の得意や歡樂が大なれば大なるほど、これと反比例に、悲痛な失意や惱みや不安が襲つて來て、それが永久に絶えないと共に、人の安心を求むることもまた永久に絶ゆることはないのである。

人生苦の現實　勿論、この世の中は千差萬別であるから、中には富も有り、權勢もあり、健康でもあつて、人の羨む境遇に生れ合せ、何の不安も苦惱もありそうに見えない人もないではないけれども、これとても永久に何等の不安も惱みもないと云ふ

わけには行かない。苟もこの世の中に生れて來た以上には、その程度の差こそあれ、何の不安も惱みもないと云ふやうなものは一人も存在しないのである。それはまた何故かと云へば、この不安や惱みに脅かされるやうな身體や心をもつて生れて來て居るが故である。

四苦八苦　人がこの肉體を以て生れて來た以上にはこの身體を養ふために食はねばならぬ。食ふためには自然に生存の競走が出來、弱肉强食の埒外に生きることは出來ない。これがすでに苦しみであり惱みである。而もその肉體は常に變化し生滅して謂ゆる無常のものである。從つていまは若くて元氣で、潑剌たる躍動を續けて居つても、須臾にして老ひ去り、紅顏空しく白頭となる惱みがある。いまは健康で生々として居つても、いつ病魔に冒されるかも分らない。たとひ病魔に冒されな

五官　視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺の器官のこと。

五蘊盛苦　色、受、想、行、識の積集(蘊)より成立せる肉體が盛んになるにつれて起る苦惱のこと。

愛別離苦　愛するものから別離する苦惱。

怨憎會苦　怨みがあり、憎しみのあるものに、會はねばならしめ苦惱。

いにもせよ、人は何時までも生きながらへることは出來ない。何れは死なねばならぬことに運命づけられて居る。この生・老・病・死の四苦はこの世に生れ來た以上には誰しも免れることの出來ない必然の數である。

たとひ身體が丈夫で元氣で、若さに潑剌として居つても、その元氣がありあまるために、五官のいろ〳〵の慾に惱まされることと(五蘊盛苦)がある。また種々の災厄や、不慮の境遇によりて愛さゝるものに生きながら別れたり、死に別れをせねばならぬこと(愛別離苦)があり、また人が社會に生存する已上には自分の氣に入らぬものや、自分に敵對する人も出來、それ等の人とは顏を會はしたくないと云つても、そうも出來ないで、恨みを忍び、怒を隱しても、その人達に遇はねばならぬこと(怨憎會苦)もある。更にまた人が生きて行くためには、その基礎條件として衣・食・住が必要で

求不得苦（願求するものが得られない苦惱。）

あるが、貧乏のために自ら求むるものを購ひ得ざる惱み（求不得苦）がある。この五蘊盛苦と愛別離苦と怨憎會苦と求不得苦との四苦を、生・老・病・死の四苦に合して八苦と云ふのである。この四苦八苦は人が生物としてこの世に存在する以上には誰一人として脱るゝことの出來ない苦惱で、これあるがために「人生は苦なり」と釋尊は宣明せられたのである。

德義や思索の上の苦惱　これらの生物學的苦惱とも云ふべき四苦八苦は、時の古今を問はず、地の東西を論ぜず、教養の有無に關せず、免かるゝことの出來ない惱みであるが、文化の程度が進み、道德意識が高揚するにつれて、道德上の不安や惱みが起つて來る。それは人として人らしい行ひをせねばならぬと同時に、それが正しいことであり、善いことであると知りながらも、種々の誘惑に妨げられてこれを行ひ得ざるために、良心の呵

責を受け、いろ〳〵の苦惱を忍受せねばならぬやうになつて來る。また人智の發達するにつれ、宇宙の神祕やら、死後の問題等につきていろ〳〵の疑問が續出し、これを解決し得ざる種々の思索上の不安や惱みが起つて來るのである。

安心問題の動機　かくの如き各方面の種々の不安や惱みを如何に心問題である。勿論、それはある程度までは世間普通の方法を以て解決することが出來ないではない。即ち病氣に罹りたるものが醫藥によりてその苦惱を脱し、食ふ米さへも購ふことの出來なかつた貧乏人がはからず金儲けが出來、「やつとこれで安心した」と云ふ如き境地にまで達することが出來るのである。

しかし、それは一時的のことで、假りにかゝる安心が出來たとしても、また直ちに種々の疑惑や苦惱や不安が湧いて來て、直ち

に心身の平和が亂れ、心の安定、安住を妨げることになる。これを如何にすれば根本的に、この苦惱や不安から解脱し、徹底的に安心不動の境地に到達することが出來るかと云ふことが動機となつて、印度迦毘羅城の一王子としての釋尊が出家し苦行し成道し、こゝに佛教が出現したのである。從つてこれらの苦惱不安を脱し、畢竟安穩の境地に至ること、卽ち安心と云ふことが佛教徒に課せられた最高の中心問題で、佛教に於ける八萬四千の教法と云つた所で、要はこの安心を說いた外はないのである。

迦毘羅城　Kapila-vastu にして、釋尊の生れし都城のこと。

第二課　安心なる言葉の用否

解脱と安心　これを內容の上から見て、佛教は一切の苦惱不安を解脱し、徹底的に安心を與へるための教法なるにかゝはらず、その佛教經典にはあまり安心と言ふ語を用ひてない。勿論、『大寶積經』第七十六卷に「大王よ當にこの法に安心すべし」とあるやうに、時としてこの安心なる語が使用せられてないではないけれども、それは曉天の星の如くに極めて寥々たるもので、大抵の場合は解脱の語を以てこれに代へて居る。これ一切の苦惱不安を解脱しさへすれば、安心はその結果として自然に得られるので、解脱と安心とはその表裏に過ぎないけれども、通途佛教に於て、安心と云ふことの代りに、特に解脱の語を主として用ひ

大寶積經　唐菩提流志譯の經典にして百二十卷より成る。いま引用せる文につきては正藏十一、四二九頁中參照のこと。

たる所以は、これこの人生の苦惱不安を痛切に直感し、これを解脱し除去することを主眼としたるが故であるらしい。

達磨大師と安心　然るに積極的にこの安心の語を使用し、これを宣明したのは、支那に於ける達磨大師で、唐道宣の『菩提達磨傳』によると、達磨がその弟子たる慧可・道育の精誠に感激し、誨ふるに眞法を以てした。その眞法と云ふのは安心と起行とで、なかんづく、その安心と云ふのは壁觀のことで、深く衆生の同一眞性を信じ、僞を捨て眞に歸せしむるために、この壁觀に凝住し、これによりて自他を超越し、寂然無爲の境地に達することが出來る。これが卽ち安心であると説明して居る。

達磨　詳しくは菩提達磨(bodhi-dharma)卽ち道法と云ひ、支那禪宗の初祖である。

菩提達磨傳　道宣の續高僧傳第十六卷に收載せられて居る。

智者大師と安心　この思想を繼承し、天台の智者大師はその著『摩訶止觀』に於て、この安心を非常に力説し、安心とは善く止觀を以て法性に安ずることなり」と定義せるのみでなく、自

智者大師　名を智顗と云ひ、支那天台の祖、梁大同四年(五三八)生れ、隋の開皇十七年(五九七)六十歳にて寂。

摩訶止觀　二十卷より成る。ここに引用せるは第五卷上にある文である

行と教化との二方面から六十四種の安心を廣説して居る。

これらの安心と止觀　すなはち、達磨大師や智者大師の説く所によるこの肉體我・物質我を中心として、これがしたい、あれが欲しいと云ふやうな慾望が基本となつて起つて來るのである。故にこれらの欲念を除去することが必要で、それには感覺的方面のいろ〳〵の欲求を制御し、何事をも思はないはゆる無念無想に心を統一し、これによりてこれらの苦惱不安を止息する、これを止(śamatha)と云ひ、さらに正見、妙觀、卽ち我欲我執によりて歪められたる邪見偏見を清算し、現實の一事一物を正しく知見することによりて、理想の標的を定め、これに心を專注し、それを徹底的に觀察し、その觀念思想に自ら融け込むことを觀(vipaçyanā)と云ふのである。この消極的の止と積極的の觀とを以て心を理想

の標的たる法性に安置し安定することが安心であるとするのである。

善導大師の安心說　善導大師　その後、唐朝には善導大師が出で、淨土の法門を皷吹し、その安心をも淨土門の立場から力說し、その著『往生禮懺偈』の前序に於て、「いま人を勸めて往生せしめんと欲するに、未だ知らず、いかんが安心し、起行し、作業せば、定んでかの國土に往生すべきや」と問ひ、それに對し、何等の疑惑をも挿まない至誠心を本として極樂淨土に心を專注し、心の深底からそこに生じたいと憧れるいはゆる深心を起し、何を見ても何を聞いても、悉くをその極樂往生のために回向し、何とかしてかの國に生じ、かの國の主たる阿彌陀佛を見んと發願する、いはゆる回向發願心を盛んにすることによりて、必ずその淨土に往生することが出來る。かゝる三心を具することが安心であると答へら

善導大師　淨土法門の鼓吹者にして永隆二年（六八一）六十九歲にて寂

れて居るのである。

支那に於ける密祖と安心の語　この善導大師の沒後、三十餘年にして、眞言密教が支那に傳播せられたのであるが、金剛智三藏はその『念誦結護』に於て「智者この門に安心して祕密を行とせよ」と云ひ、一行阿闍梨はその『大日經疏』第二に於て、「一向に諦理に安心し務めて穿徹ならしむべし」と云へる如くに、全く安心と云ふ語を使用しなかつたわけではないけれども、主として觀とか觀心とか無畏とか住心とか云ふ如き語を專用し、あまり安心と云ふ語を用ひて居らない。これはこの安心の語が淨土門のそれに混じ易く、これによりて密教獨特の旨趣を表現し難き憾みがあつた故であるらしい。

安心の語に對する宗祖と末徒　わが國に於て、弘法大師もまたしきりに住心とか無畏とか信心とか云ふごとき語を使用

金剛智　支那密教の祖にして開元八年唐、開元二十九年（七四一）寂、七十一。

念誦結護　具には念誦結護法書、通俗部と云ひ、一卷、金剛智が弟子に授けたものである。

一行　支那密教の祖、善無畏三藏につきて大日經を聞き、その口說を筆記して大日經疏二十卷を撰す。開元十五年寂、四十五。

憲深　醍醐山の座主にして無量院流の始祖、弘長三年（一二六三）七十二歳にて寂。

宗骨抄　眞言宗全書第二十二卷に收載せられて居る。

せられながら、安心と云ふ語を一向に用ひられて居らない。然るに大師の後、淨土の教門が我國に遍く傳播するや、淨土門にいはゆる安心と云ふことが矢釜しくなり、その結果、眞言宗の安心は一體どこにあるのか」などゝ質問するやうなものも出て、自然にそれがわが宗にも影響して、安心と云ふ語が用ひられるに至つたものらしい。それはすでに我國に於ける淨土教の開祖、法然、親鸞と同時代の憲深がその『宗骨抄』に於て、「問ふ眞言行者、生死の二位に於て如何に安心し、生死を離るべきや等とて安心の語を力説し、更に德川時代になりては盛んにこの安心の語が強調せられて居るのである。

密宗に於ける安心と住心と信心　これを眞言密教の立場からする限り、安心と云つても、住心と云つても、これらの間に何等の異りがあるのではない。それは全く同一のことを異つた言

捨攞駄　原語は śraddha

葉で表現した外はないのである。これ安心とは心をある理想の標的に安置し安住せしむることなるが故にこれを住心と云ひ、またその理想の標的に心を安住せしむることは、卽ちその理想の標的を信じて疑はざる純眞の信の心を基本とするが故にこれを信心とも云ふのである。

能入の深信と能度の信解　この信心に於ける信と云ふことにつき、『大日經疏』にはこれを二つに分つて說明して居る。その一は捨攞駄卽ち深信のことである。いはゆるそれは人に依る信で、佛とか祖師とか云はるべきものは完全者であり、人格者なるが故に、決して妄語するやうなことはない。故にその說かれたる敎法は決して間違なしと信ずるが如きを云ふのである。すべて佛道に入るためにはこの佛を信じ祖師を信ずると云ふことが大切で、これなくては到底、佛道に入ることは出來な

阿毘目底
大日經疏には abhimukti とあれども、普通に信解の原語は adhimukti である。

い。かの『智度論』第一に「佛法の大海は信を以て能入とし、智を以て能度とす」と云へるその信とはこの深信のことである。

その二は阿毘目底即ち信解のことである。これはすでに佛道に入りたるものが親しくその教法を聞きその義を思惟し、自己全身を傾倒してそれに沈潛したる結果、自ら疑ふとしても疑ふことの出來ない確信を得るに至つたことで、これを『大日經疏』には、「この信解、梵音に阿毘目底と云ふ。明かにこの理を見て心に疑慮なきを云ふ。井をほるに已に漸く泥に至れば未だ水を見ずと雖も、水必ず近きに在りと知るが如し」と云ひ、この信解がやがて止觀の中の觀(vipaçyanā)に相當し、『智度論』に「智を以て能度とす」と云へる智に匹敵するのである。

二種信心と安心

されば約まる所、わが眞言宗につきて安心を得るためには、我等の迷妄を憐れみ、その迷妄より生ずるいろ〳〵の疑惑や不安を一掃してやらうと云ふ御思召から、この眞言祕密の法をわが國に傳へられたる宗祖・弘法大師の御人格の尊とさを信ずるとともに、その大師によりて教示せられたる佛菩薩や法門を有難きものとして衷心から信ずると云ふことが、わが宗に入るための關門である。この關門を通過し、眞言門に入りて、その阿闍梨や先輩から、眞言教法の如何なるものなるかの內容を聽聞し、その義を思惟すると共に、寢ても覺めてもこれに全心全意を傾倒し、自らその中に融け込み、疑ふとしても疑ふことの出來ない信解を確立することにより、一切の疑慮不安を退け、根本的に安心を得ることが出來るのである。

第三課　古來の宗意安心說

宗意と安心　人生の苦惱や不安を徹底的に解消し、永久にこれから解脫せしめてやらうとの佛の精神を體して、廣く敎線を張つて居るのが佛敎各宗である。わが眞言宗もまた佛敎の一派である已上、この範圍を出でないので、人をこの安心の境地に導くために、宗義若くは宗意の施設があるのである。その宗意と云つても目的とする所は一宗の宗要とし正意とし理想とする標的に心を安住せしめ、これによりてあらゆる不安苦惱を解脫せしめんとする外はないのである。

密宗の宗意　しかるに眞言宗は一切の不安苦惱を超越せる

とその表現　如來の體驗世界を宣揚せることを以て主眼と

し、その境地は凡ての言語思慮を超越せる絕對不思議の世界なるが故に、宗義の上に於て、これを表現する形式が一樣でなく、各々の立場から種々樣々に表現し說明せられてゐるのである。それで如何なる表現が宗意の中心をなし、端的に安心の標的を直示するかと云ふことにつきては、各人その見る所が異つて居るのである。

密宗に於ける諸種の安心說　その結果、等しく眞言宗の安心を說く上に於ても、如實知自心安心とか、菩提心安心とか、本不生安心とか、凡聖不二安心とか、密嚴佛國安心とか、十方淨土安心とか、都率淨土安心とか、西方淨土安心とか、更に進んでは卽身成佛安心とか、三句安心とか、三力安心とか、三密修行安心とか、光明眞言安心とか云ふやうに種々樣々の安心說があるのである。これを類別し圖示すると左の通りである。

古來の安心說　これらの安心說については長谷寶秀篇、眞言宗安心全書參照のこと。

如實知自心　本當に實の如くに自分の本心を知ること。

菩提心　菩提(bodhi)卽ち悟りの心のこと。

古來の安心說

- 如實知自心安心
- 菩提心安心
- 本不生安心
- 凡聖不二安心
- 密嚴佛國安心
- 十方淨土安心
- 都率淨土安心
- 西方淨土安心
- 卽身成佛安心（理具・加持・顯得）
- 三句安心（菩提心・大悲・方便）
- 三力安心（自力・他力・法界力）
- 三密修行安心（三密双修）
- 光明眞言安心（一密口唱）

（如實知自心安心～密嚴佛國安心：根本安心）
（十方淨土安心～西方淨土安心：枝末安心）
（根本安心・枝末安心：安心）
（卽身成佛安心～三句安心：安心及起行）
（三力安心～光明眞言安心：起行）

根本の安心　これらの安心說の中、何れが一番正しいのか、若くは何れが最もよく我宗の宗意に適合して居るのかと云ふことになると、その答案は中々容易でない。併し試みに此等の安心說を分類し檢討して見ると、如實知自心安心、菩提心安心、本不

本不生　一切のものは本來、生とか滅とかを超絕して常恒無限なること。

凡聖不二　凡夫も聖者も本質の上からは二つあるものでないとのこと。

密嚴佛國　秘密莊嚴の大日如來の國土のこと。

生安心、凡聖不二安心、密嚴佛國安心の五種は何れも密宗安心の標的たる絕對不可思議境を異つた言葉で表現したに過ぎないので、これを內容の上よりせば、決して矛盾するものでない。すでに說明せる如くに、大師は安心と云ふことの代りに住心なる語を用ひ、眞言宗の安心を自ら揭揚して祕密莊嚴住心と說かれて居る。この祕密莊嚴住心、換言せば祕密莊嚴安心と云ふ中には、如實知自心と云ふことも菩提心と云ふことも本不生と云ふことも、凡聖不二と云ふことも密嚴佛國と云ふことも悉く包含され、これらの五種安心を統一し網羅したものがいはゆる祕密莊嚴安心で、これが眞言宗の指導者たり、阿闍梨たるべきものゝ確立せねばならぬ根本安心なのである。

枝末の安心　この根本安心を確立したる上に於て、未だこの根本安心に到達せざる信者などを引入する敎化の方便として

十方淨土　東西南北、至る所、自分に縁のある淨土のこと。
都率淨土　都史多(tusita)天にある彌勒菩薩の淨土のこと。
西方淨土　西方十萬億土にある阿彌陀佛の淨土のこと。
理具の成佛　我は本來佛としての本性を具し、本來佛なることを自覺すること。
加持の成佛　我卽佛の觀法を修し、凡夫と佛とが加持感應して一體となり、觀境中に實現する成佛のこと。
顯得の成佛　たゞに觀境のみでなく、生活の上に佛の活動を顯現し體得すること。
菩提爲因等　菩提卽ち全一としての本當の我を悟ることが眞言道の基本原因で、これより自然に湧出する同體大悲が敎化活動の根本となり、これによりて自由に善巧方便をめぐらすに至ることが眞言道の究竟なりとのこと。
三摩地　心を一境に集中する定(samādhi)のこと。
光明眞言　大日如來の眞言にして一切の佛言隨の總咒と稱せらるゝもの。

十方淨土や西方淨土や都率淨土などを勸むることもあるので、密敎經典の中に、たとひ此等の淨土安心が說かれて居つても、それは攝化の方便として假設せられたる枝末の安心に過ぎない。人は何時までもこの枝末の安心に沈滯すべきでなく、常に向上を念とし、最後には根本安心に止住するやうにせねばならぬのである。

それは安心か起行か　また理具・加持・顯得の三種卽身成佛說を以て眞言宗の根本安心であるとする說もあるけれども、理具の卽身成佛は暫く措き、加持の卽身成佛とか顯得の卽身成佛とか云ふのは、全く安心を確立したる後の起行に屬するものとも見るべく、更に菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟の三句法門を以て密敎の根本安心とする說も、同樣に三句の中の大悲爲根と方便爲究竟とは安心以後の起行を示したるものなるが故に、これを以て純然たる安心を直示せるものとは云はれないのである。

その他、自ら修する功德力と如來のこれを擁護し加持し給ふ力と此等の背景をなせる法界力との三力こそ密敎の特質にして眞言宗の安心であるとなし、或は手に印を結び、口に眞言を誦じ、心三摩地に住する三密双修を以て眞言宗の安心とし、また光明眞言の念誦相續を以て眞言宗に於ける易行の安心とする說もあるけれども、これらは何れも起行に屬し、すでに安心を確立したるものが、その安心を堅實にするため、若くは安心そのものを行爲の上に具現するためのもので、精密なる意味に於て、これをそのまゝ安心と云ふのは穩當でないと思ふのである。

第四課　根本安心の内容

十住心論　天長年間、淳和天皇の勅命により、眞言宗の特質を宣明せる、弘法大師の撰述にして十卷より成る。

そこで眞言宗の根本安心たる祕密莊嚴安心とは如何なる安心であるか、先づその内容を一通り檢討して見る必要がある。

祕密莊嚴安　大師の『十住心論』第十によると、「この祕密莊嚴安心と全一我」心と云ふのは究竟して自身の源底を覺知し、實の如くに自身の數量を證悟することなり」と說かれて居る。すなはち凡俗の人はこの肉體を中心とする物質我を本當の我と思つて居るけれども、これは決して本當の我ではない。本當の我と云ふのは決して孤立的に獨存して居るのではなく、一切のものと共に、互に交渉し關聯し、全一として生きて居るのである。いはゆる主觀客觀の見るもの見らるゝもの、聞くもの聞かるゝ

もの、その他、人も野も山も河も一切のものが渾然一體となりて、一瞬々々を無限に生きて居る。これこの一瞬には過去の一切時を含み未來の一切時を孕んで、この一瞬卽ち永遠なるが故である。かく一切のものが全一として一瞬を永遠に生きて居る、これが本當の現實である。普通にこれが自分だ、あれが他人だと云ふやうに考へるのは、この具體的の全現實の中から抽象し分析して云ふことで、實際の現實としては、自分と他人とが互に離るゝことの出來ない交渉關聯の中に一體となつて生きて居るのである。この宇宙には全があつて部分と云ふものはない。それが本當の現實であり、本當の我である。故にこの本當のこの心如何と云へばそれは一切の心に連なり、その本當の我の身體如何と云へば、その數量は限りなく、單に人體のみでなく、草も木も山も河も宇宙一切の委は一として本當の我の身體や委で

ないものはないのである。この一切を以て全的に莊嚴せる本當の我の身心がそのまゝ祕密莊嚴なるが故に、祕密莊嚴安心と云ふのは、換言せば全我安心に外ならないのである。

全我安心と　これを『大日經疏』第二十には「一事の眞實にして

我卽法界　虛しからざるあり、いはゆる我れ卽ち是れなり、我れ卽ち是れとは決定して我は卽ち法界なり」と說かれて居る。また眞言宗に菩提(Bodhi)卽ち悟を開くと云ふことも、詰りはこの本當の我の實相を實の如くに知ることを云ふので、これを『大日經』には「いかんが菩提とならば謂く實の如く自心を知るなり」と說かれて居る。こゝに自心と言ふのは物質我、肉體我を基本とする個心を指すのではなく、本當の我としての自心、卽ち絕對心のことなのである。

全我と一　この本當の我に目覺め、全現實をありのまゝに知

卽一切　見するとき、この宇宙の一切のものは一として本當の我の內容にあらざるはなく、一切のものは互に交涉し關聯して、全一として生きて居ることが分るのである。この交涉關聯の中に全一として生きて居るのであるから、宇宙の一事一物は恰も縱橫無盡に織り成されたる織物の中の絲の交叉點とも結び目とも云ふべく、その結び目たる一事一物はその個體を中心とする限り、個々別々の獨立の姿を呈して居るけれども、その一つ〳〵が何れも縱橫無盡の一切の力を宿し、その一切を背景として立つて居るので、本當は無盡であり無限である。これを一卽一切とも一切卽一とも云ひ、その一事一物がそのまゝ全一でもあり、絕對でもあるのである。

全我と凡　かくの如く、本當の我の內容としての一切のもの

聖不二　は、何れもその一つ〳〵が一切を背景として絕待

而二莊嚴　この而二と云ふ語は不二と云ふ語に對して用ひられ、不二全一としての一切の事物が各々に自己の地位、立場をまもりて、その内容を充實し莊嚴すること。

を生きて居るのであるから、生とか滅とか云ふ如き對立を超越して本來不生不滅である。これを本不生と云ふのである。すでに生とか滅とか云ふ對立を離れて絶對的に生きて居るのであるから、凡夫とか聖者とか云つても、それは全一としての現實から抽象し分析しての概念に過ぎないので、本來は不二であり一體である。これを凡聖不二と云ふのである。

凡聖不二と　この凡聖不二と云ふことは言葉を換へて云へば、凡夫なり聖者なりが、各々宇宙一切を背景として無限を生きて居ると云ふことである。各々に無限を生きて居ると云つても、どれもこれもが全く同一であると云ふのではない。宇宙の一事一物は何れも一切の力を宿し一切を背景としながらも、各々獨自の立場からその表現を異にし、櫻の花が如何に自らの美を恣にして居つても、その美が櫻自體の絶待性

を誇示するに止まり、決して他の花の美を侵し、その絶對性を傷けるやうなことをしないのである。かく何れもが全一としての世界を背負ひながらに、各々の立場から各自獨特の表現をなし、宇宙を無盡に莊嚴して居る。而もその無盡莊嚴の實相は心眼にのみ映ずる境地で、凡俗の肉眼には見ることの出來ない神祕隱密の世界であるから、これを祕密莊嚴世界とも密嚴佛國とも云ひ、これに心を專注し安住して一瞬々々を無限に永遠に生きることが、大師のいはゆる祕密莊嚴安心なのである。

人法不二と　この祕密莊嚴世界と云へば法であり、境界であり、見らるゝ客觀世界と云ふことになるのであるが、この客觀世界の外にこれを見る所の主觀の人體が別存する譯ではなく、現實より云へば物と我とが一體となり一枚となつて生きて居るのである。かの大師が『卽身成佛義』の中に於て、

物我一體

「能所の二生ありと雖も都て能所を絶す、法爾道理に何の造作かあらん、能所等の名は皆是れ密號なり」とある如くに、所觀の祕密莊嚴世界がそのまゝ祕密莊嚴の大日如來であり、それが本當の我の姿である。

全我體認と止觀　この無盡莊嚴の本當の我は本來絶待的のものなるが故に、對立を基本とする心量概念を以てはこれを思議することが出來ないのである。これを如實に認識し把握するためには、いはゆる神祕的直觀の方法によりてこれを體驗する外はないのである。その神祕的直觀にも消極と積極との二方面があり、消極的には對立を特性とする感覺を抑制し、これに基く散亂心を止息し、いはゆる無念無想の境地に入りて本當の我の實相を實感し體驗することで、これを止(śamatha)と云ふのである。併しこれのみを以てすると、時として心が沈滯

し潑剌たる生命の活動力を消失することになる。故にこれを助くるに積極的の方法を以てする必要がある。

その積極的方法と云ふのは、いはゆる觀(vipaçyanā)のことで、肉體我、物質我の觀點から事物を歪曲するのではなく、全一としての立場から本當の我の實相たる祕密莊嚴の標的を徹底的に觀察し思念し、心をこれに集中して、自らその標的に融け込み、それになり切り、やがてはそれが行爲として具體的に表現する源泉となることである。

全我安心と人生苦の解脱　この止と觀、すなはち無念無想と一念堅持、換言せば消極・積極の方法によりて、心を本當の我の實相たる祕密莊嚴の境地に安住し安定する眞言宗の安心を體得するに至れば、人生の苦惱や不安は自然に解消し、安らかな生活を實現することになるのである。かの生・老・病・死等の四

苦八苦と云ふも、主とする所は肉體我・物質我の立場から自他を區別し、事物を對立的に把握する結果に外ならない。故にこの比較對立を解消し、全一としての本當の我に目覺め、一瞬々々を無限に生きるとき、これらの生とか死とか敵とか味方とか云ふ如き比較對立を超越し、安心不動の境地を實現することが出來るのである。

病氣・貧乏の見方・扱ひ方　いま病氣と貧乏とを例にとりて考ふるに、これらは最も苦しいものであり、最大の不安を與へるものとして、人の恐るゝ所であるけれども、交渉關聯のいろいろの因緣の中に、全一として生きて居る以上には、個人の獨力を以て如何ともすることの出來ないものがある。これと同時に、病氣をするにしても貧乏をするにしても、それには何等かの意味があるのであるから、それを味ひ得るだけの心構へが必要で

ある。これ病氣には壯健の人の味ひ得ざる人生の深味とか、心の奥底に沈潛せる本當の我のさゝやきとかを把握し味得するに最も至要の便宜が惠まれて居るのである。また貧乏の如き、それは極めて不便であり、不自由であるには違ひないが、この不便、不自由と云ふことは必ずしも不幸と云ふことではない。この不幸とか不安とか云ふのは精神上の問題であるから、心に確乎たる安心が構成せられると、自然に心内の不安、苦惱が克服せらるゝことになる。勿論、富貴は人の欲する所であり、貧賤は人の惡む所であるけれども、種々の因緣に醞釀せられて、貧賤の境遇に落入つたとせば、自らその貧賤を生かし、その貧賤を樂しむやうにせねばならぬ。これこの貧賤にもそのもの獨特の天地があり、かの孔子が云へる如くに、疏食をくらひ、水を飲み、肱を曲げて枕とする赤貧の中にも獨特の樂しみがないではないから

である。

その境遇を、要は病氣にせよ、貧賤にせよ、それらはみな種々**生かすこと**の因縁によりて醞釀せらるゝものであるから、人が若しこの境地に直面したとせば、自らその直面せる境地を生かすやうにすることが必要である。而して如何なる微少のものにも全力をそゝいで、本當の我の内容を莊嚴するやうにせねばならぬ。これが眞言宗に於ける祕密莊嚴安心の内容なのである。

第五課　總安心と別安心

宗意安心の一　一宗の安心はその宗の定むる所の正意に心**貫性と多樣性**を安住せしむることであるから、その宗意安心は一つに限るべき筈で、一宗の安心が二つも三つもあるべきはずはないのである。しかし人の天性素質は種々樣々であり、その素質教養が異なるにつれ、同一の宗意安心を奉ずるものゝ中でも、細かく云ふと、その安心に厚薄があり、その了解に淺深があるのは自然の趨勢と云つてよいのである。

古來の二根安心　たとひその厚薄があり淺深があつても、それ**說と三根安心說**　は同一安心の進展途上に於ける區別で、決して性質を異にした別種のものではない。然るに人に素質教養

三種の安心　上中下の三種安心說は東禪城師などの所說で「安心全書」卷上、五五七頁參照のこと。

が異なり、機根に上下があると云ふ上から、わが宗意安心の上に於て、全く性質を異にせる對等的の二種若くは三種の安心を立てるものがある。例せば上根上智のものは卽身成佛を安心とし、下根劣慧のものは往生淨土を安心とすと云ふが如き、また卽身成佛は上根の安心、往生淨土は中根の安心、彌勒下生への結緣は下根の安心とするが如き卽ちそれである。

これは全く一宗開創の本旨を沒却せる議論で、正當なるものとは云はれないのである。少くとも一の指導原理を宗要とし、それに立脚して開宗せる以上には、一宗の安心は如何に多樣の觀を呈して居つても、それは結局、一安心の上の始中終であり、程度の差異であつて、全く性質目的を異にせる別種のものであつてはならぬのである。

總別安心　勿論、根本安心が一であつても、これを奉ずる機根

堪然　密教の祖、不空三藏と同時代にして、天台の教風を宣揚し、德宗の建中三年（七八二）七十二歲にて寂。荊溪尊者、または妙樂大師と稱せらる。

止觀大意　一卷を以て智者大師の摩訶止觀二十卷の精要を錄したるもの。

說の由來　の不同によりて、種々樣々の異つた姿を呈して來るのは止むを得ない。從つて一宗の安心を總安心と別安心とに分つことがある。この一宗安心を總別二種に分つことは、天台智者大師の『摩訶止觀』に於て、人の利鈍を問はず、通じて云へば、止觀を以て、法性の理に安住するを安心とし、それが種々の機根に應同して六十四種となると說けることが、その淵源をなし、この思想を繼承し、荊溪尊者堪然はその『止觀大意』に於て、正しく總安心、別安心の語を用ひ、通じて法界に安住するを總安心とし、人の性に順じてこれをいろ〳〵に別開するを別安心とすと云ふやうに說明せられて居るのである。

淨土宗の總別安心と密宗安心敎示章　この總別二種安心の思想に基き、わが國の淨土宗でも欣求淨土の菩提心に安住するを總安心とし、至誠心、深心、回向發願心の三心に安住するを別安心と

別安心　密宗安心教示章に於ける二門分別章等參照のこと。

する說を立てゝ居る。　これ淨土宗所依の經典たる『大無量壽經』卷下に於て、「淨土に往生せんとせば須らく菩提心を發すべし」と云ひ、また『觀無量壽經』には「彼の國に生れんと願せんものは三種の心を發すべし」と二樣に說くが故である。

わが宗では明治布敎界の元老たる服部鑁海僧正がその筆になる『密宗安心敎示章』や、その『講義錄』に於て、この總別二種安心說を採用し、我宗の總安心としては上根下根の隔てなく凡聖不二と定つて居るけれども、別安心としてはこれを上根と下根とに分ち、上根は機敎相應門にして三密双修、卽身成佛、下根は敎益甚深門に住し、一密口唱、順次往生をその安心とすと云ふのである。

卽ち

別安心（上根勝慧―三密双修―卽身成佛―機敎相應門
下根劣慧―一密口唱―往生淨土―敎益甚深門）

二根安心說の檢討　しかしこの上下二根を對立的若くは對等的に考へ、眞言宗徒でありながら、自分は下根劣慧のものであるから卽身成佛などは到底覺束ない、せめては極樂往生でも出來れば、勿怪の幸であると云ふやうに、自らを卑下し、その當位に沈滯して、向上進取の念なきものは本當の眞言行者とは云はれない。

その人の如何を問はず、何れも佛になり得る素質を本來具有せぬものはないのであるから、上根と云ひ、下根と云つた所で、それはたゞ一時的の程度上の區別に過ぎない。　從つて自ら口に下根だと稱しながらも案外に上根のものもあり、上根だと自ら己惚れて居つても、それが必ずしも上根でない場合もある。　上下二根と云ふことは比較上のことであり、程度上のことであるから、根本的に自ら決し得ることではないのである。

かの『大日經』に於て、佛が淨菩提心の轉昇や住心の續生を說示せるが如くに、菩提の體驗と云つても、住心卽ち安心と云つても、次第に向上し進展するものなるが故に、自ら精進し努力して、劣弱の安心に沈滯せず、一歩一歩、最後の根本安心たる祕密莊嚴安心に到達するやうにせねばならぬのである。

然るにもかゝはらず、『眞言宗安心和讃』には、

五濁惡世の此ごろも　上根勝慧の者ありて
如說に修行する時は　正像末のへだてなく
一念一時一生に　三密加持の不思議にて
無盡の功德圓滿し　卽身成佛せらるなり。
下根劣慧のともがらも　決定諦信いたしなば
一度神咒を唱ふるも　無明を除くと說き給ふ。
一密おこたることなくば　增上緣の力にて
三密具足の時いたり　終には佛果を證すべし。

と云ひ、また『弘法大師和讃』に於て、

眞言宗旨の安心は　上根下根の隔てなく
凡聖不二と定まれど　下根に示す易行には
偏に光明眞言を　行住坐臥に唱ふれば
宿障何時しか消えはてゝ　往生淨土と定まれり。

とあるが如き、一見する所、何れも上下二根を對等的に固定的に扱つて居る外觀を呈して居る。しかしその本旨とする所は根本安心に進轉するための一時的方便として、淨土往生などの枝末安心の必要なること、並にこれを緣とし出發點として、終には根本安心に涉入するに至ることを示すにありと見るが穩當のやうである。

古來この服部鏤海僧正の總別二種安心說に對しては批難多

く山縣玄淨著の『密宗安心論』などにはこの密宗安心を總別二種に分つことを以て、服部鏤海師の新説とし、これには何等の根據なく、全く信ずるに足らないとして居るけれども、これを總別二種に分つことは古くすでに多くの例のあることで、何も服部鏤海師の新説と云ふわけではない。たゞ總別相通じない對立的の別種の安心を施設することが新説であるとの義とせば、かく云はれないこともないのである。

悉地　悉地（siddhi）は成就の義にして、不可思議力を成就することゝ。

密宗に於ける三品悉地と三根説の意義　密教經論の上に於て、上中下の三根を分ち、上中下の三品悉地（シッダ）を説くやうなことがあつても、これらは何れも祕密莊嚴の境地を開見して、卽身成佛することを目標とする人達の上の程度上の區別で、決して卽身成佛と順次往生と云ふが如き、全く性質を異にせる上の區別ではない。すなはち『大日經疏』第三に於て、三品悉地を説き、「上は密嚴佛國、中

修羅宮　印度最古の神の一たる阿修羅（asura）の宮殿にして須彌山の北、大海の水底にあり等と稱せらる。

十緣生　幻、夢、陽炎等の十喩を以て因緣生無自性を觀ずる法門のこと。

攝一切佛頂尊　金剛佛頂尊のこと。

十字眞言　aḥ, trūṁ trūṁ dhrūṁ, 等の十種字より成る眞言のこと（大正一九、三四一頁中下）。

は十方淨嚴、下は諸天修羅宮等とあるけれども、これはかの「三品悉地」の論則にもある如く、眞言行者が自己の意樂によりて、現生に三品何れの悉地宮に往詣しても、その往詣せる悉地宮に於て、十緣生の觀門を修し、これによりて凡ての繫著を離れ、卽身成佛すべきことを説いたものである。また『大妙金剛經』に於て、眞言行者に上中下の三根の不同あることを説けるも、それは攝一切佛頂尊の十字眞言を誦じて、祕密莊嚴の體驗を得るに當り、上根のものは百八遍、中根のものは一千遍、下根のものは一萬八千遍を誦ずることによりて、何れも卽身成佛することを説いたものである。

密宗に於ける總別安心　これによりてこれを考ふるに、密宗安心を目標とする人の上にも上中下の區別を立てないと云ふわけではない。しかし此等の人々はたとひ厚薄淺深の程

度上の異りこそあれ、何れも密宗の正意に適合せる根本安心に住せねばならぬ。その根本安心何ぞやと云へば卽ち祕密莊嚴安心、換言せば全我安心の外はないのである。

第六課　六種安心と十種安心

眞言宗の總安心たる祕密莊嚴安心をば『大日經』には機の淺深に隨ひ、敎養の勝劣に應じて六種に開き、これを六無畏として說明して居る。これが卽ち六種安心である。

無畏と安心　この六種安心、卽ち六無畏に於ける無畏とは梵語の阿濕縛娑(āçvasa)で、これを直譯すると「蘇息する」「息を吹き返へす」と云ふことである。その蘇息とはあらゆる煩悶苦惱のために精神的に喉を扼され、ほとんど死に瀕したるものが、本當の我に目覺め、精神的苦惱から脫して氣息を吹き返へし、漸く安心を得たることを云ふので、約まり、蘇息と云ひ、無畏と云ふのは安心のことに外な

らないのである。

六無畏　その安心の六種、卽ち六無畏とは善無畏、身無畏、無我無畏、法無畏、法無畏、法無我無畏、一切法平等無畏で、これらの六無畏は眞言密教を奉ずる人達の中に於て、その教養の差異や機根の上下によりて生ずる種々の煩悶苦惱を克服し解脫することによりて得らるゝ安心である。

六種安心に對する苦惱　しからば如何なる煩悶苦惱を脫却することによりて、この六無畏卽ち六種安心が得らるゝかと云ふに、『大日經』住心品にはこの煩悶苦惱をば粗と細と極細との三種とし、粗妄執卽ち自我を中心とする煩悶苦惱と、細妄執卽ち非我を中心とする煩悶苦惱と、極細妄執卽ち對立を中心とする煩悶苦惱とに分つて居る。

第一、乃至、第三　この三妄執、卽ち三種の苦惱を更に細分する

の苦惱と安心　と六種となる。その中、自我を中心とする粗妄執が、罪惡不善に關する苦惱と性慾等に關する苦惱と個人主義に關する苦惱とになる。これを暫く第一苦惱、第二苦惱、第三苦惱と呼ぶことにする。第一苦惱は殺生や偸盜等の種々の犯罪や不善をなすことによりて、法律に罰せられはせぬか、社會から制裁せられはせぬかと云ふやうに、日夜その不安に苦しめらるゝことで、これ等の不安苦惱を脫するためには、自ら自己の非を反省し、倫理道德を遵守することにより、初めて不安を脫し安心を得ることが出來る。これを善無畏と云ふのである。第二の苦惱は主として青春期に達したる人の經驗するもので、異性を慕ひ、情慾に驅られ、美人とか麗人とか云つてそれに憧がれ、これを我ものにせんとして身を燒く思ひに惱むのである。これらの苦惱を脫却するためには不淨觀を修し、如何に美人とか麗

人とか云つた所で、それはたゞ皮膚一重のことであり、恰も錦袋の糞に過ぎないことを知悉し、これに依りて苦惱を除き安心を得る、これを身無畏と云ふのである。第三の苦惱はこの肉體我を以て獨立自存の本當の我と誤認し、この誤認に基き、自らその自由を得、常樂を得んとするための苦惱で、これらの苦惱を脱却するためには無我觀を修し、この肉體我・物質我は種々の因緣によりてたゞ一時的にその姿を現出せる假我・僞我に過ぎざることを照破し、これによりて苦惱を除き安心を得る、これを無我無畏と云ふのである。

第四第五の苦惱と安心　これらの無畏安心によりて物質我・肉體我の空無なることを知つたとしても、此等を包容する天地は悠久にして恒に存在し、現下の支那の如くに、戰ひ破れて次から次に兵士は戰沒しても「國破れて山河あり」と云ふやうに、

非我の國土は昔のまゝの俤を留めて居る。この非我の法を恒有と堅執することより生ずる苦惱を法執とも細妄執とも云ひ、これを物慾に關する苦惱と唯物主義に關する苦惱とに分つのである。これを第四苦惱、第五苦惱と名付くることにする。

第四苦惱は名譽とか財産とか顯榮の地位とかの恒存を偏執し、これ等をわが物とせんとする物慾のために惹起せらるゝものである。この苦惱を除くためには物慾を制御し、財産や名譽や地位などを見ること、恰も幻夢陽炎の如くに須臾にして消失するものなることを深く觀じ、無願三昧に住することが必要である。これによりて不安を除き安心を得る、これを法無畏、卽ち無願安心と云ふのである。第五の苦惱は物質のみの恒存を認めてこれを重視し、人格とか精神とか云ふ如きものをその影とし第二次的のものとして、これを輕視し若くは否定し、そのため

に前途に光明を失ひ理想を沒却し、それから生ずる種々の惱みである。これらの不安苦惱を除くためには物質の獨存性を否定し、心識を離れて外に相狀差別の物質なきことを觀ずる無相三昧に住し、これによりて不安を脱し安心を得る、これを法無我無畏、卽ち無相安心と云ふのである。

第六の苦　最後に對立を中心とする極細妄執とは矛盾相剋

惱と安心　に關する惱みで、これが第六の苦惱である。これ人はすでに個我や物質の獨存性なきことを知りながらも、永き習慣の結果として、自他を區別し、物心を分ち、貧富・貴賤・高下の種々の對立世界に生きて居るのである。そのために互に相剋し相食む矛盾鬪爭を現出し、種々の苦惱を生じて來る。これらを除くためにこの對立矛盾を高き立場より超克し止揚し、これによりて不安を去り安心を得る。これを法平等無畏、卽ち不二安

心と云ふのである。

これ等『大日經』に於けるこの六無畏、卽ち六種安心をば弘法

の圖示　大師は開きて十種とし、十住心卽ち總別十種の安心としたのである。いまこれを三妄・六無畏に比較し、これを圖示すると左の通りである。

十種安心の一貫性　かくの如くに、密宗安心が總別十種になつて居るからと云つても、此が決して性質を異にする對立の安心ではなく、たゞ機の利鈍により、本當の我の如何なるものなるかを體解する程度の淺深に應じて十種としたに過ぎない。故に大師はその『十住心論』第十に於て、如實知自心の一句を釋し、「これこの一句に無量の義を含み、竪には十重の淺深を顯はし、横には塵數の廣多を示す」と說かれて居る。こゝに云ふ知自心とは、云ふ迄もなく、本當の我を實の如くに知ると云ふことである。

前九種安心と第十安心　されば、この一瞬一瞬を無限に生きて居る全一てもこの本當の我に心を安住する全我安心、卽ち祕密莊嚴安心がわが宗の根本安心なのである。この根本安心に到達する方便とし過程として、第一より第九に至る別安心が開かれて居る

泰範　もと傳敎大師の弟子、後、弘法大師の弟子となる。

道雄　東大寺に於て華嚴の疏鈔を究め、本邦華嚴宗第七祖となる。後、弘法大師に歸して十大弟子の一となる。

けれども、これは極めて程度の低きものより漸次轉昇する過程を、九種としたものに過ぎないのであるから、機の勝劣、敎養の如何により、第一、乃至、第九の何れの階級より第十の階位に進入するも差支なき筈である。これを大師の十大弟子の上につきて考ふるも、泰範は天台宗よりわが宗に轉じたるものなるが故に第八住心より、道雄は華嚴宗よりわが宗に入りたるものなるが故に、第九住心より歸入したるものと云つてよいのである。

第七課　安心と教化

密宗僧侶として　宇宙一切のものが交渉關聯のうちに全一として一瞬一瞬を絶對的に生きて居る。これが本當の我であるとともに、この祕密莊嚴の本當の我に心を安住し、最も生き甲斐のあるやうに生活して行くのが、わが宗の安心である。少くとも、わが宗の指導者たる位地にある僧侶としては、是非ともこの根本安心を把握せねばならぬのである。

密宗の根本安心と教化の問題　この根本安心を把握するとともに、これを以て社會民衆を指導する、此が教化であり、傳道である。これこの社會民衆と云つても、それは本當の我の內容に過ぎないのであるから、これを緣なき衆生として棄て去るこ

憍陳如　凡さには阿若憍陳如(ajña-kaugdinya)と云ひ、鹿野苑の初轉法輪に於ける五比丘の一。

四諦　苦と集と滅と道とに關する四の神聖なる眞理(諦)のこと。

十二因緣　一切の迷途の法は無明、行、識等の十二の因緣によりて生起すること。

とは出來ない、何とかしてこれを救濟せねばならぬ。而も自ら體驗せる根本安心を如何に此等の社會民衆に說明し了解せしむべきかと云ふことが問題となつて來る。これこの社會に生存する民衆は、何れもその氣質を異にし、教養を異にし、甲の人の是なりとし眞なりとして確信することが、必ずしも乙の人をして、かく信ぜしめ能はざるが故である。

釋尊は如何に教化せられしや　かの釋尊が菩提樹下に正覺を成じ給ひし時、如何に人に說くべきかを思惟し給ひしもこれがためである。釋尊が憍陳如等の佛弟子に對して、四諦、十二因緣等の道理を說きたればとて、至る所、如何なる人に對しても、常にかゝることを說いたのでなく、一化五十年の間、機に臨み變に應じて種々樣々に說法し教化せられたのである。

清淨にして　これは請法集要經第十、生天品の文である。

四阿含經　中阿含經、長阿含經、增一阿含經、雜阿含經のこと。

特に教養の充分でない、知識の程度の低き一般信者などに對しては、四諦、十二因緣などの六かしい原理を說いても到底了解せられないから、たゞ世法に准じて布施をせよ、戒を行ぜよ、清淨にして心質實なれば當に天上に生ずることを得べし」と云ふやうに生天思想などをも鼓吹せられて居るのである。

佛教聖典の矛盾と四悉壇　かく機に應じ變に處し、種々に方便して說かれたる一化五十年の說法を結集したものが『四阿含經』を始め、凡ての聖典なるが故に、この佛教聖典の中には一方に是と說けるものが一方には非と說かれ、至る所、矛盾不統一の觀を呈して居るのである。

これを龍樹の『大智度論』第一には世界悉壇、第一義悉壇、爲人悉壇、對治悉壇の四悉壇(siddhānta—宗)、卽ち四種の方軌に基きて辨明し、佛の說法は時として世界の現相の上から說き、時としては

第一義の絕對相から說き、時としては各人の樂欲に應じて說き、時としては有と執し若くは空と執する迷執を對治するがために說く、この故に佛の說法が區々になつて居るのだと云ふ。

大日經の慧と方便　これによりて見るも明かなる如く、佛は自らの體驗、自己の根本安心を說くに當つても、必ずその所化の氣質や心病に應じて敎化すべきことを示されて居るのである。この精神に則り、密敎の根本經典たる『大日經』には慧と方便、卽ち自己の體驗、自己の根本安心とともに、これを說くためには方便巧說の必要なることを至る所に力說して居るのである。

大日如來の化儀　さればこそ、その『大日經』住心品には佛自らの體驗たる一切智々を得給へる後、如何にこれを種々の一切の有情に遍く分布し、如何に種々の道と種々の性欲と種々

或は聲聞乘道　これは大日經住心品に於ける文である。

乾闥婆　乾闥婆（gandharva）は八部衆の一にして尋香と譯す。音樂の神なり。

摩睺羅伽　これも八部衆の一にして、睺羅伽（mahoraga）は大腹行とも大蟒神とも譯す。人身蛇首の神である。

外道　佛教以外の宗教のこと、主として印度の婆羅門教等を指す。

の方便とに應じて開演すべきかを示し、或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乘道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中に生じ、及び龍、夜叉、乾闥婆、乃至、摩睺羅伽に生ずべき法を說き、若し衆生あつて佛を以て度すべき者には、卽ち佛身を現じ、或は聲聞身を現じ、或は緣覺身、或は菩薩身、或は梵天身、或は那羅延、毘沙門、乃至、摩睺羅伽、人、非人等の身を現ず」等と示されて居るのである。

無碍樂說と一切智々　この『大日經』の文相などを一見すると、密教徒ではありながら、外道の教を說いてもよく、基督教の傳道をしてもよく、禪、淨土、日蓮、何の布教をしてもよいやうに見え、苟も一宗の立場よりする根本安心を說くものとは請取れないやうである。然れども、この經文の眞意はそんなことを示したのではなく、經文の初に「一切智々を得給へる後」と斷つてある如くに、密教の根本安心たる祕密莊嚴一切智々を得たる後、その

聲聞　佛の說法を聞きて悟りを開く佛弟子のこと。

緣覺　因緣覺若しは獨覺等と云ひ、現身に佛の教を受けずして、無師獨悟し、獨く自ら悟るも他を教化せざるものを云ふ。

根本安心を外道や聲聞・緣覺等の人達の機根に合するやうに種々に方便し加減し按排して說くべきことを示した外はないのである。

根本安心を通じての諸種の教說　如何に外道の教にもせよ、聲聞・緣覺の教にもせよ、若し一たび、密教の根本安心たる祕密莊嚴一切智々のレンズを透して見るとき、その悉くが何れも密教の根本安心たる一切智々の色を帶びることになる。これを開會すると云ひ、若くは加持すると云ふのである。卽ち密教に於ける根本安心の光明を以てこれを淨化し密教化して、何れをも自家藥籠中のものとして說くことである。禪、淨土、日蓮等の如何なる教法にもせよ、一たびこの祕密莊嚴のレンズを通過せば、その一言一句が悉く密宗の根本安心を暗示するものとなる、これを如義語とも密號名字とも云ふのである。

四重祕釋とその意義內容　苟も眞言密教の指導者たる眞言の僧侶が密教の根本安心を以て教化するためには、その時代の各階級の民衆が了解し得るやうに種々の方法を以て種々に方便し手加減して說かねばならぬ。　これを『大日經疏』には四重祕釋と云ひ、一のことを說明するにしても、その所化の機根に應じて四通りに說明すべきことを示して居る。　卽ち淺略釋とは世間普通の立場から、そのものゝ當面の意味を說明すること、深祕釋とはそのものを標幟として密教上の深義を寄顯すること、祕中の祕釋とはその有限相對の事物をば直に無限化し絕對化して說明すること、祕々中の祕釋とは無限絕待のものが具現してこの有限の相を呈せることを直示することである。　卽ち、

- 淺略釋――事物の當面釋
- 深祕釋――事物の標幟釋
- 祕中祕釋――相對事物の絕對化釋
- 祕々中祕釋――絕對の相對具現化釋

四重祕釋

十住心に於ける淺深二種の扱ひ方　かの大師の十住心の如きも、これを淺略釋の特質を示したものに過ぎないけれども、これを深祕釋の上からすると、十住心何れもが密宗の根本安心を示せる總別十種の安心を說いたものに外ならない。　それは民衆の知識程度に應じ密教の根本安心を種々に手加減し、それを了解し得るやうに說くべきことを示したものである。

密宗本尊の多樣なる所以　藏菩薩や、さては毘沙門天、辨財天、吉祥天、聖天等、種々樣々の佛菩薩天等をまつり、これに向つて祈禱すること

をすゝめるのも、實はこの密教の根本安心を宣布するための攝化の方便に過ぎない。　これ凡夫と云ひ、佛と云つても、本來は異つたものでないにもせよ、對立世界に住する民衆を教化するためには、矢張り凡夫と聖者とを對立せしめ、凡夫に對して佛を別立すると共に、その別立せる佛菩薩聖者の中に、理想としての眞我を求めしめ、それをして漸次に修養し向上せしめて、遂には入我々入の凡聖一體觀に導き、全一としての本當の我を認識せしめ、全我としての生活を營み得るやうにしたものである。

密宗に於ける物慾祈禱の攝取　然るにこの全一としての生活を目標とするものが、その肉體我を基本として、この肉體保存のために除難招福とか、息災延命とか、當病平愈とかを種々樣々の佛菩薩・天等に向つて祈請するが如きは、全く矛盾であり、迷信である。　故に斷然これを排斥すべきだと論ずるものもある

けれども、これを密教の立場からすると、機根萬差なるが故に、たとひ個我のためにする物慾祈禱と雖も一概に排すべきではない。

かの病褥に臥したるものがその快復を祈り、貧困に惱めるものが幸福の招來を希ふが如き、これ全く人情の然らしむる所で、人に慾望の存する限り、これを絶滅することは難中の難である。それよりも巧みにこれを善用して、この物慾祈禱を入門として、本當の我を反省せしむるやうにし、これによりて物我一如の本當の祈りに達せしむるやうにしたのが密教である。

非常時に處する覺悟　ちて奮戰して居る皇軍將兵のために、彈丸除けや、敵兵降伏の御守などを送ることも大に意義あることである。いまや正に非常時に際會して、たゞに皇軍將兵のみでなく、國民

一般が同心協力して盡忠報國の念に燃え、一身を捧げ、自己を空うして祖國のため、陛下のために大きく生きやうとし、その自覺するとせざるとに拘らず、何れもが全一としての本當の我を呼び覺ましつゝある時である。この時こそ全我安心を目標とするわが宗徒の大に活躍すべき時であり、またそれがわが宗徒に課せられたる一大使命である。

約言　要する所、密教の安心は全一としての本當の我に心を安住し、一切のものが相依り相助けて各自に離るべからざる關係に於て、全一として生きて居るのが本當の我の姿であり、內容であることを、寢ても覺めても忘れないやうにし、この本當の我を充實し莊嚴せんがために、各人が自己の肉體を中心とし、機關として働いて居る。かく各々に働いて居ると云つても、その何れもが宇宙全を各々に背景とし、各々の立場からその宇宙全を

充實し莊嚴することをその使命として居るのである。たとひ一瞬間と雖も本當の意義に徹し、その一瞬間を永遠に生きることになれば、謂ゆる「朝に道を聞いて夕べに死するも可なり」である。各人がこの使命を果すことによりて宇宙全としての祕密莊嚴世界が現出する。これが密教徒の理想であり、この理想に住することが密教徒の根本安心である。而もこれを說くに當りてはその所化の機根や教養に應同して、種々に方便し按排して說くことが自然に別安心を構成することになるのである。

昭和十三年三月二十日印刷
昭和十三年三月三十日發行

教學文書
第三輯

眞言宗安心讀本
定價五十錢

著者　栂尾祥雲
和歌山縣高野山宗務所

發行者　中井龍瑞
京都市下京區西洞院七條南

印刷者
代表者　須磨勘兵衛
內外出版印刷株式會社

發行所　古義眞言宗務所學務部
發賣所　高野山大學出版部
（和歌山縣高野山・振替大阪八〇八二二番）

終